

# 『ヴェニスの商人』 試論

## Unexplained melancholy と友情

相 原 信 彦

### 〈はじめ〉

H. Granville-Barker はこの劇を現実性のないおとぎ話だ<sup>1</sup>とみなしたが、それはこの劇がそのような誤解を産みやすい複雑な要素を含んでいることを示していると思われる。又この劇を Portia や Antonio に代表されるキリスト教社会の、Shylock に象徴されるユダヤ教社会に対する勝利とみなす解釈もあるようだが、それも、A. D. Moody が反論しているように<sup>2</sup>この劇を余りにも単純に図式化しようとした結果と言わざるを得ないだろう。しかしながら、本論の目的は、そうした図式化された解釈の原因を究明することではなく、Portia の〈勝利〉の形で終わってはいるものの、争いの中にいて、表面的には勝った Portia の側にいるはずの Antonio にとって、その勝利が全く意味をなさないことを、彼の unexplained melancholy と友情との関係で考えてみることにある。

### 〈1章〉

Shakespeare の劇においては、しばしば 'appearance' と 'reality' の乖離の問題が提示され、そこから様々なドラマが展開されている。この劇の中でも、その問題は Portia の館における箱選びや人肉裁判における彼女の変装に象徴的に示されていると思われる。しかし、重要なのは、乖離の事実そのものではなく、その中に落ちこんだ人間がどういう反応を示すか、

ということであろう。私が *Hamlet* について考えた〈演技〉の問題もそうしたものの一つにすぎない。まさか、今だにそれに縛り付けられているわけでもあるまいが、*Hamlet* の心の問題を考えていく時に引用した Antonio のいわゆる 'unexplained melancholy' を自分なりに説明してみようとする時、逆に *Hamlet* の〈演技〉を意識せずには書けなくなってしまう。そして、その Antonio に3000ダカットの金を貸す時、「ほんの気まぐれ」<sup>4</sup> から要求した Antonio の胸の肉一ポンドに執着する Shylock の心の動きにしても、いろんな解釈が他にも考えられそうであると意識しつつも、同様に〈演技〉という眼でしか見えなくなっている。揚句の果てには、自分勝手にさほど魅力的ではない Bassanio に対する Portia の愛情まで、父親の命令で自分で自分の運命を選択できなくなってしまったことに反抗する結果生じた〈演技〉ではないかと考えてしまっている。さすがに、それは偏りすぎていると思われるので、本論では、Antonio と Shylock の〈演技〉についてだけ触れてみることにする。

Antonio の性格分析なり心理分析を試みようとする時、第一幕第一場の冒頭の科白に全てが集約されていると思われる。

In sooth I know not why I am so sad,  
 It wearies me, you say it wearies you ;  
 But how I caught it, found it, or came by it,  
 What stuff 'tis made of, whereof it is born,  
 I am to learn :  
 And such a want-wit sadness makes of me,  
 That I have much ado to know myself.

(1. 1. 1-7)

2行目の 'It' 及び 'it' は文法的に見れば3行目、4行目の 'it' と同じく、1行目の 'sad' を受けているものだろうが、この7行全体から判断するな

らば、'sad' だけを受けているというよりも 'I know not why I am so sad' 全体を示していると言った方が、5行目から7行目の内容に合うように思われる。つまり、Antonio が苦しんでいるのは、彼が 'sad' な状態にいるからではなく、その原因がつかみきれないからだ、ということである。そして、この自分で説明することのできない 'sad' な状態はしばしば 'melancholy' という言葉をあてられ、いろいろな解釈がなされているものである。

まずは、J.R. Brown が *The Arden Shakespeare* の中で引用しているように、<sup>5</sup> K.B. Danks は Antonio の melancholy を Shakespeare がよく使う劇のその後の展開を観客に予知させるものだと解釈している。確かに、Antonio は Bassanio のために Shylock から借りた金を約束の期日までに返済することができず、危うく命をおととしてしまいそうになり、そうなれば Bassanio と Portia、Gratiano と Nerissa の結婚も考えられないところである。その意味では、この解釈は的を得ているわけで、否定する気は全くない。<sup>6</sup> しかし、私自身の関心は、この科白の中にそうした 'chorus' 的役割を見出すことではなく、劇全体の流れというよりも、むしろ Antonio 自身の内的葛藤とでも言えるものと結びつけることにある。そしてそれには二つの解釈が考えられるのである。一つは、J.R. Brown のように、Antonio の melancholy を Bassanio との関係で考えるものと、もう一つは、その melancholy を Shakespeare がこの劇を書いた当時の社会的風潮及びその中における Shakespeare 自身の置かれていた状況と結びつける解釈である。まずは、J.R. Brown の考え方から見てみることにする。

J.R. Brown は *The Arden Shakespeare* の脚注の中で、Antonio 自身その原因が説明できない melancholy を 'a relic of an earlier version of the play' とする Schücking の解釈を紹介した後、それに反論する形で、Antonio のそのいわゆる 'unexplained' melancholy を、説明できないゆううつという曖昧なものとしては片付けずに、もっと端的に、melancholy の原因は Bassanio との〈関係〉にあると注釈している。

Schücking thought this “unexplained” melancholy was a relic of an earlier version of the play (*Character Problems* (1922), p. 171) but, since Antonio knows about Portia (cf. 11. 119-21) the imminent parting with Bassanio, his friend, is ample motive for it. “Amity”, or friendship, is an important theme in the play (cf. Introduction, pp. xlv-xlvi). Shakespeare may have used this oblique beginning for the theme in order to arouse interest and speculation in the audience; the motive for the melancholy becomes clear as soon as Antonio and Bassanio are left alone (l. 119).

It was usual to be unaware of the cause of one's melancholy (cf. *Cym.*, I. vi. 61-3), or at least to be secretive about it (cf. L. Babb, *The Elizabethan Malady* (1951), pp. 137 and 159).<sup>7</sup>

J. R. Brown が言わんとしているところは極めて明白で、改めて言い換え、説明するまでもない。Antonio の melancholy の原因は Bassanio が Portia に求婚するために彼から離れ去ってしまうからだ、というものである。そして、友情というものがこの劇の重要な主題となっていると彼は説明しているのだが、Amity を double quotation mark で表わしているのは、J. R. Brown も Introduction の中で引用しているが、Bassanio への Antonio の〈友情〉を、*Sonnets* の中に示されているように、女性が原因で自分の友人を失う時に強く感じられる心情に結びつけたものであろう。その〈友情〉は、Shylock によって命をおとそうとしている Antonio に対して Bassanio が見せる友情とは異質のものであり、私がこの春 Royal Shakespeare Theatre で見た Royal Shakespeare Company による公演は、まさにこの〈友情〉を観客に十二分に意識させるものであった。Director の Bill Alexander も Antonio を演じた John Carlisle もその〈友情〉を意識していたはずで、いわゆる人肉裁判において、客観的には勝訴した裁判の結果も、彼の〈友情〉からは Bassanio との別離を意味するものに他ならず、Antonio 役

の John Carlisle が、笑顔ひとつ見せず、どちらかというと沈んだ表情に終始していたのも、判決を素直に喜ぶことのできない理由があるからで、それが “Amity” であると推測するのは、自然な推測と言えるだろう。J. R. Brown は、Antonio が、彼の melancholy の原因がこの〈友情〉にあることに気づいていなかったのか、それとも意識的に隠そうとしていたのか、という点までは結論を下していない。確かに、冒頭の Antonio の科白からだけではそのいずれかに決めるだけの根拠となるものはないが、Solanio に

Why then you are in love. (1. 1. 46)

と melancholy の原因を ‘love’ だと指摘され、それに ‘Fie, fie!’ (*Ibid.*, 46) と答えた Antonio の答え方に、J. R. Brown は次のような解釈を与えている。

But the hesitation suggested by the incomplete decasyllabic and the ambiguous nature of Antonio's answer (it is an exclamation of reproach rather than a clear negative) might indicate that Solanio has got close to the real cause of the melancholy;<sup>8</sup>

Antonio の ‘Fie, fie!’ という短い答えの中に Solanio が核心をつこうとしたことに対する ‘reproach’ の意味を持たせ、なおかつ、第四幕第一場の裁判の場で、Shylock の毒牙にかり果てようとする時 Bassanio に向かって使う ‘love’ という言葉に、同じ〈友情〉の響きを見出すのであれば、冒頭の Antonio の科白は、彼が melancholy の原因はわかっていながら、意識的にそれを隠そうとしたものだとして、J. R. Brown は言い切ってもいいのではなかろうか。確かに冒頭の科白だけでは、Antonio が彼の melancholy の原因を意識していたかどうかは決めかねるところではあるが、Bassanio から Portia のことを聞かされ、彼女に求婚するのにそれに見合うだけの仕度をするための金を用立ててくれるように頼まれた時、「快く」という

よりも、寛大すぎる位にその申し出を受けているのはなぜか。又、自分の手元に用立てる金がなく Bassanio のために仕方なく Shylock から金を借りる時、いくら軽蔑しているとはいえ、必要以上に Shylock をののしり刺激しているとは思われないが、それはなぜか。

Mark you this Bassanio,  
The devil can cite Scripture for his purpose,  
An evil soul producing holy witness  
Is like a villain with a smiling cheek,  
A goodly apple rotten at the heart.  
O what a goodly outside falsehood hath!

(1. 3. 92-7)

I am as like to call thee so again,  
To spet on thee again, to spurn thee too.

(*Ibid.*, 125-6)

ユダヤ人 Shylock にむけられたむきだしの憎悪と Bassanio への惜しめない友情を別々に考えることが不可能であるとは言わない。しかし、その両極端とも言える程相反する感情は、Antonio の二面性と考えるよりも、同じ一つの源から発したものだにとらえる方が納得できるのではないだろうか。

Go with me to a notary, seal me there  
Your single bond, and (in a merry sport)  
If you repay me not on such a day  
In such a place, such sum or sums as are  
Express'd in the condition, let the forfeit  
Be nominated for an equal pound

Of your flesh, to be cut off and taken  
In what part of your body pleaseth me.  
(*Ibid.*, 139-47)

Shylock も負けてはおらずに、上のような全く Antonio への嫌味としか思えない条件を申し出る。Antonio 同様 Shylock も、Antonio が約束の期日に金を返すことが出来ないなどと考えているとは思えず、まさにこの条件は Shylock にとっては、日頃のうっづんを晴らすためのものでしかなかったはずである。Antonio にとってがまんすることができないはずのその申し出も何らためらうことなく、というよりもむしろ、すすんで受け入れているように思われる。

Content in faith, I'll seal to such a bond,  
And say there is much kindness in the Jew.  
(*Ibid.*, 148-9)

これをどう解釈すべきであろうか。

心の底から軽蔑し、口などきくのはもってのほか、会えばつばを吐きかけたくなる Shylock から金を借りなければならず、しかも、そんな思いをしてまで借りた金は、Bassanio への〈友情〉に別れを告げる役割しか果たさない。ならば、Bassanio の申し出を Antonio は拒むことができるだろうか。Bassanio は Portia へ求婚することはできず、彼のもとに戻ってくるかもしれないが、その時二人の間にある友情は以前の友情ではあり得ず、そうなれば Antonio が心密かに抱いている〈友情〉もその影響を受けざるを得ないだろう。つまり、Antonio にすれば、Bassanio の友情に応じて Shylock に借金を申し込む羽目になろうが、Bassanio の友情に根ざした信頼を裏切って Shylock と会うことを避けようが、いずれにせよ〈友情〉を持続させる望みはすでに失われてしまっているのである。結果として、彼

は友情を優先させたわけであるが、その道を選んだことで彼はますます苦しむことになるのである。Bassanio に Portia という女性がいる限り、彼は Bassanio への〈友情〉が実らないものと意識しそれを忘れようとするが、〈友情〉を忘れるための友情が、逆に〈友情〉を意識させるように働くのを彼は痛いほど感じとっているのではなからうか。そうでないとするならば、Shylock への度をこえた彼の口ぎたない言葉はもとより、約束の期日に金が返せなくなった時、Antonio の命乞いを懸命にするヴェニスの大公や Bassanio を尻目に、当の Antonio が全くその気を見せず、むしろ、好んで Shylock の刃にかかろうとしている心理を理解することはできない。又、裁判官に化けた Portia の機知<sup>11</sup>によって命を救われ、その上 Shylock は Antonio の胸の肉どころか、元金の3000ダカットも返してもらえず、更に財産まで没収されることになり、普通であれば、Antonio にとって溜飲の下がる思いがしてもよい判決が下された時、彼が、大喜びする Bassanio や Gratiano とは対照的にその結果を冷静すぎるほど冷静に受けとめているのを私たちはどのように説明すればいいのだろうか。<sup>12</sup>それは、喜びのあまり言葉がでてこなかったのではなく、その勝訴というものが Bassanio への〈友情〉の決定的破綻を意味するものでしかあり得ないからではなからうか。この場面は、演出家がよく強調するところであるが、演出家が作り出すコントラストは、Portia 側の勝利と Shylock の敗北というものにとどまることが多い。数年前に見た劇団四季の演出もその一つで、肩を落とし舞台から去って行く Shylock の姿をシルエットで描写した後、まぶしいほどの照明を舞台に残っていた Portia たちにあてていた。そうした演出は効果的ではあるが、光の中において独り影をつくる Antonio の心を描くには不適當である。<sup>13</sup>

Bassanio への Antonio の友情を「寛大すぎる」と考え、それを彼の性格に帰してしまう解釈を否定するつもりはないが、Antonio の友情が寛大すぎるようにうつるのは、その友情が〈友情〉を忘れようとし、演技し作り出されたものだからではないだろうか。

〈2章〉

J. R. Brown が Amity に double quotation mark をほどこしていることをもとに Antonio の melancholy を〈友情〉という視点から解釈してみたが、それとは全く異なる解釈も可能である。

市河・嶺両氏による研究社版 *The Merchant of Venice* の Introduction では Antonio のことが2頁にわたって説明されている。一部分を抜粋してみることにする。

無敵艦隊を屠って一弱小国から一躍ヨーロッパの強国に列し、フランスやスペインからの永年の憂うつな圧迫の雲を払いのけて、一朝にして白日のもとに自由な空気を吸い、手足を思うように伸ばすことができるようになった Elizabeth 治下のイギリス国民は、調子にのって、際限もなく歌い、踊り、あばれまわるかのようにであった。しかし、歓楽極まるどころ、やはり悲哀が生ぜざるを得なかった。Elizabeth 女王が崩じ、James 一世の時代になり、16世紀が終わりに近づき17世紀が始まろうとするころ、敏感な人たちは誰も彼れも一種の憂うつを感じた。この気分を当時の人は“melancholy”と呼んでいた。それは歓楽につづいて起こった倦怠の別の名であったか、または、将来に関する不安の予感であったか、どうかわからない。けれどもこの気分はますます深くなるばかりであった。Hamlet も、わけ知らぬ憂うつに悩まされていたというこの劇の主人公 Antonio もともにこの気分の患者であった。<sup>14</sup>

J. R. Brown が Antonio の unexplained melancholy を、Bassanio との “amity” 又は friendship の関係でとらえようとしているのに対し、研究社版では、彼の melancholy を劇の他の人物やプロットとは関係をもたず、この劇が書かれた当時の社会の状況・雰囲気伝えるものと見なしている。そ

して編者は、一般的社会状況のみならず、作者 Shakespeare 自身が「そろそろ人生の前途に不安を感じ始める年輩に達しつつあった」ことが Antonio の unexplained melancholy となって描き出されているのかもしれない、と続けている。確かにこの劇の冒頭の Antonio の科白は、J. R. Brown のように Bassanio との関係で考えないとすれば、劇の中では文字通り「説明できない」 melancholy であり、それをあえて説明しようとするならば、作品の背景に、一般的であれ個人的であれ、その糸口を見つけるしか他に方法はないと思う。<sup>15</sup>ただし、この Antonio の melancholy と彼の Bassanio に対する好意を、「そのうえに melancholy に悩まされていたので、正当な判断を働かす余裕もなくて、Bassanio の再三の浪費に出資して、ついに一命をも危うくしようとするにいたった。」としているのは納得できない。その前に、Antonio の性質として、友人に対する「誇張とも見られるほど」の親切さと「弱」さを挙げているが、どうしてそのようなことが言えるのか。なるほど、見方によっては身勝手な Bassanio の要求に文句も言わず応ずる彼の姿をそのように捉えられなくもないが、それだけのことで Antonio の性質を非常に弱いと定義するには説得力がないように思われる。つまり、彼の親切さと気の弱さを melancholy と対等なものとして論じるのではなく、その二つの性質と見られるものは彼の unexplained melancholy が産み出したものと考えの方が説得力のある説明になるのではなかろうか。

melancholy そのものの研究は Burton に譲るとして、ここではその melancholy が説明できない状態に陥っている人間の心理がどのようなものであるかを考えてみることにする。

Macbeth を例にとってみよう。

Duncan, King of Scotland の大将として戦に赴き、そこから Banquo と共に帰る途中、二人は三人の witch に出会う。正体を知ろうとする Macbeth に三人は、

First witch

All hail, Macbeth! Hail to thee, Thane of Glamis!

Second witch

All hail, Macbeth! Hail to thee, Thane of Cawdor!

Third witch

All hail, Macbeth, that shalt be king hereafter!

(1. 3. 47-9)<sup>16</sup>

という言葉を投稿ける。最初の witch が使った称号は、その肩書きをつけ戦いに出かけた Macbeth にとっては至極普通の呼びかけである。ところが second witch の Thane of Cawdor は、Cawdor の領主が Duncan に反逆したが失敗に終わり、逆に Duncan からその称号を剥奪され、Duncan はそれを Macbeth に与えることをこの場の前の第一幕第二場で宣言しているが、無論その場に居合わせていない Macbeth がその経過を知る由はない。それを聞いた Macbeth の心に多少の戸惑いが起ったと思われるが、その彼に追い討ちをかけたのが third witch の “that shalt be king hereafter!” である。それに Macbeth がどのような反応を示したかは、Banquo の

Good sir, why do you start, and seem to fear

Things that do sound so fair!

(*Ibid.*, 50-1)

でわかる。Banquo も Macbeth 同様、Thane of Cawdor のいきさつは知らないのであるが、「いずれ王になられるお方」というのは、耳に心地よい響きを持つ呼びかけと考え、それに恐れおののく ‘start’ ‘fear’ Macbeth とは対照的の反応を示し、Macbeth ばかりにいい思いをさせるのは不公平だと言わんばかりに、彼の将来も告げるように迫る。その Banquo の科白と三人の witch の答えの間、Macbeth は、Banquo の言葉を借りるとすれば

'rapt' な状態に陥り何一つ言葉を発することができないでいるが、まるであわが消えていくように三人が姿を消そうとした時、激しく問いつめようとする。

Stay, you imperfect speakers! Tell me more!  
 By Sinell's death I know I am Thane of Glamis;  
 But how of Cawdor? The Thane of Cawdor lives  
 A prosperous gentleman. And to be king  
 Stands not within the prospect of belief—  
 No more than to be Cawdor. Say from whence  
 You owe this strange intelligence; or why  
 Upon this blasted heath you stop our way  
 With such prophetic greeting? Speak, I charge you!

(*Ibid.*, 69-77)

Shakespeare の巧みさは74行目の “No more than” の使い方である。この比較級の使い方は、一見すると Macbeth が Cawdor の領主になるのは王になるのと同様彼の心の中にはないと読めるが、裏を返すならば、いずれか一方が実現されると他方も実現するかもしれないという考えにつながる。この時点で Macbeth がそれをどこまで意識して口にしていないかはわからないが、witch 達が消えた直後、Duncan の使いの Ross に Cawdor の領主に任ぜられたとの報告を受けた時、それは Macbeth の中ではっきり意識される。

(aside) Glamis, and Thane of Cawdor!  
 The greatest is behind.

(*Ibid.*, 115-6)

彼の眼にはそばにいる Banquo 達の姿は入っていない。彼は witch の soliciting が “Cannot be ill, cannot be good” と迷いを見せてはいるが、すぐに

My thought, whose murder yet is but fantastical,  
(*Ibid.*, 138)

と、王になることと Duncan を殺すことを結びつけてしまう。その二つのことは全く次元の違うことであわてて否定しようとするが

Come what come may,  
(*Ibid.*, 146)

と Duncan 殺しへ突き進んでいく。実際に彼の館に来て眠っている Duncan を殺す時、彼は戸惑いを見せ Lady Macbeth に性格の弱さをののしられるわけであるが、その時も結局は Duncan 殺しを実行に移している。彼が、Duncan を殺すことをためらったのは、Lady Macbeth が指摘した気の弱さから来ているのでも、人殺しをすることに対する良心の苛責というものでもないだろう。そうではなく、Duncan を殺した結果王になったところで、そこに何の意味も見い出せないことを彼が感じとっているからこそ、Duncan を殺すことをためらったのであろう。自分自身で何ら意味を見い出せないものと意識し、なおかつ、その行動が自分を破滅させるものと感じている自分の存在を意識しながらも、なおかつすすんでいくしかないのが Macbeth の悲劇と言えるが、第一幕第三場の彼の科白の中に、その悲劇はすでに語られている。引用が重複するところもあるが、Duncan 殺害を思いついた時、彼は次のように言っているのである。

My thought, whose murder yet is but fantastical,

Shakes so my single state of man  
That function is smothered in surmise,  
And nothing is but what is not.

(*Ibid.*, 138-41)

G. K. Hunter は最後の 2 行を次のように言い換えている。

the power to act is annihilated by my speculations; so that the only thing that exists in the present is what does not really exist in the present—thoughts of the future (pp. 143-4)

ここで G. K. Hunter のいう “thoughts of the future” が Duncan 殺しという狭いものを示しているのではないことは明らかである。とにかく、現実に存在しているものは何もない、更にいえば、何かを手に入れた時、それは彼にとって “nothing” なものになってしまうわけで、彼の有名な “Tomorrow speech” は、それでもなおかつ今だ存在していないもの (what is not) に意味を見い出そうとするしかなかった彼の苦悩を如実に語っているものである。

Macbeth がどうして現に存在しているものに意味を見い出せなくなったのかは、今は問わない。Duncan を殺すことなど考えたことのない彼が、自分の中に Duncan を殺すことを考えている自分自身を発見し、恐れおののき、それまで彼の思考なり行動を律していた倫理感——大げさに言えば世界観——が崩れてしまった結果かもしれない。が、いずれにせよ、自分で意味を見い出すことが出来ず、自分の状況を説明することのできない現実を捨てるために、彼は “Tomorrow” へとすすんでいくしかなかったのであり、その限りにおいて、Duncan を殺すことは一つの方法にすぎなかったと言える。

Antonio が Bassanio に見せた友情についても同じことが言えるのではな

かるうか。彼はどういうわけか melancholy な状態にはまり、その中で不安定な居心地の悪さを感じている。私は、その彼がいつそくとびに、Macbeth のように “what is not” の中にしか意味を見出すことが出来なくなったと言おうとしているのではない。しかし、原因のはっきりしない melancholy に陥った人間がまずやろうとすることは、二つしかないだろう。一つは原因を究明すること、もう一つはそれを忘れることが出来るものに自分を没頭することである。Antonio は unexplained melancholy にとりつかれていることを告白した後で

And such a want-wit sadness makes of me,  
That I have much ado to know myself.

と、原因不明の melancholy の正体をはっきりさせたいようなことを口にしてはいるが、劇の中でそれらしき行動をするところはなく、この unexplained melancholy はそのまま中途半端な形で置かれ、その後は、彼と Bassanio との友情、Shylock との争い、いわゆる happy end の結末というように、全く別の話が展開されているように見える。そのために、彼の友情が寛大すぎるものと写るのかもわからないが、その Bassanio への友情も Shylock への激しい憎悪も、そうすることですわり心地の悪い状態から何とか抜け出そうとするための方法、言い方を換えるとなれば、友情と敵意を意識的に示すこと、つまりは演技することで、unexplained melancholy から抜け出し、一つのはっきりとした自分の姿を作り出そうとしているのではなからうか。しかしながら、そうして作り出したものは、あくまでも unexplained melancholy の上に築かれた見せかけのものにすぎず、本質的には彼の心の中に、その新しい像はぴったりとは納まらない。彼の unexplained melancholy をその当時の不安定な人々の気持が反映されたものだとするならば、ましてや Shakespeare 自身の個人的問題までこの melancholy の中に読み込もうとするのであればなお更のこと、Shakespeare

がそれに安易な答えを出すとは考えられない。Antonio が友情を示し、Portiaのおかげでその友情を貫き通すことができたにもかかわらず、その後の彼が、unexplained melancholy を訴えた時と同じ表情に戻っているのも、友情を演じてはみたものの、結局何も変わることがなかったことを彼が感じているからではなからうか。

### 〈結び〉

Antonio の melancholy と友情との関係を二つの視点で考えてみた。いずれが正しいか、と決めなければならない問題ではないし、私自身、好みを別にすれば、正直決めかねている。しかし、友情を J.R. Brown のように double quotation mark でくくろうがどうしても、彼の unexplained melancholy との関係で考える時、Bassanio への友情は、あくまで演技された友情であり、Portia による裁判の勝利は、Antonio にとっては全くと言ってよい程、彼の melancholy を解決してはいないと思われる。すなわち、この劇は形の上では happy end で幕を閉じてはいるものの、この枠の外に追いやられているのは Shylock だけではなく、Antonio もやはり、その輪の中に入りきれないままで舞台を去っていると言えるだろう。

### 〈注〉

1. H. Granville-Barker, *Prefaces to Shakespeare*.
2. A.D. Moody, *Shakespeare: The Merchant of Venice* (Studies in English Literature 21) (Edward Arnold, rp. 1981) pp. 9-13.
3. 下関市立大学論集第30巻第2号参照。
4. Shylock. and (in a merry sport)  
*The Merchant of Venice* の引用は、全て *The Arden Shakespeare* ed. by John Russell Brown による。
5. p. 4.
6. 後で引用する *Macbeth* でも三人の witch の登場と、例の 'Fair is foul,

and foul is fair' の科白がその後の混とんとした劇の展開を示しているように、確かに Shakespeare ではよく見られる手法ではある。

7. p. 4.

8. p. 7.

9. J. R. Brown はこの love に 'i. e., friend, as in *Sonn.*, xiii. I' と注釈している。p. 115.

10. Antonio.

Why fear not man, I will not forfeit it,—  
Within these two months, that's a month before  
This bond expires, I do expect return  
Of thrice three times the value of this bond.

(1. 3. 152-5)

11. Portia の裁判については Keith Geary, *The Nature of Portia's Victory: Turning to Men in 'The Merchant of Venice'* (S. S. 37) 参照。

12. And stand indebted over and above  
In love and service to you evermore.

(4. 1. 409-10)

と言っているにすぎない。

13. Royal Shakespeare Company の演出では Antonio は他の者とは少し離れたところに立っていたが、彼にとってこの方が裁判の〈勝利〉がどんな意味を持っているかが、はっきりわかる。

14. *The Kenkyusha Shakespeare: The Merchant of Venice* Edited with Introduction and Notes by SANKI ICHIKAWA AND TAKUJI MINE. Introduction pp. xx-xxi.

15. 当時の庶民の生活については J. F. C. Harrison, *The Common People: A History from the Norman Conquest to Present* (Flamingo, 1984) の Part 1, Part 2 を参考にした。

16. *Macbeth* の引用は *New Penguin Shakespeare: Macbeth* ed. by G. K. Hunter による。